隷獣（れいじゅう）

秘木編 2

あんぷらぐ

荒縄工房

SM小説

隷獣2

秘木編

あんぷらぐ著

荒縄工房・発行

本作品はすべてフィクションであり、実在する人物・地名・団体とは一切関係ありません。また、特定の個人、団体、宗教、人種、性別などを誹謗中傷する意図はありません。

あんぷらぐ

ＳＭ雑誌に「仲ゆうじ」名でＳＭ小説を執筆して作家活動をスタート。その後、編集の仕事に携わる。九〇年代よりネットで複数のペンネームで小説を執筆。二〇一一年「荒縄工房」より「あんぷらぐど」名義で独自の自虐的ＳＭ小説、伝奇ＳＭ小説などを発表。二〇一九年「あんぷらぐ」に改名。東京在住。

目次

主な登場人物　6
秘密　8
極恥　81
隘路　138
極悦　205
探索　266
使役　326
苦悶　396
捕縛　446
追跡　502
作戦　558

悦楽　603

奥付　660

主な登場人物

わたし　志絵乃（しえの）　学生。
樺川美貴江（かばかわみきえ）　志絵乃の母。
浮目（うきめ）京子　志絵乃の担任。
阪木（さかき）佳祐　教頭。
阪木豪太　教頭の息子。志絵乃の同級生。
薦田（こもだ）健也　佐恵の父。
日義（ひぎ）宗典　日義（ひぎ）一族の首領。

纐纈一派　秘木ハンター。四姉妹である江（ごう）、季絵、万、末江たちはアイドルグループ「フォーシークレッツ」として活動中。

秘木

全長三十八センチ。瓢箪のようなくびれでつながる二つ球体。それぞれ最大直径四十六ミリと百四ミリ。太古より存在し、その正体と機能は不明。

秘密

肉便器――。

ひどい言葉です。わたしと母がつましく生活している古ぼけたアパートの表札に、「肉便器」と張り紙がされていたのです。

これまでも何回もありました。

その意味はいやというほど知っています。

母は肉便器――。

「樺川」の表札の上に名刺ぐらいの大きさで張り付けられた「肉便器」を思いきり引きちぎりました。粘着力が強すぎたのか、真ん中あたりで破れてしまいまし

た。「肉」が残っていますが、触るのもイヤで、あきらめました。

「ただいま」

わたしはわざと大きな声で言ってから、ドアノブを回しました。こういうとき、たいがいカギはかかっていません。

狭い玄関には男ものの靴であふれていました。そのニオイ。黒い革靴もあれば、履き潰されたスニーカーもあります。

息をとめておそるおそる、わたしはその靴をきれいに揃えて並べていきます。そうしないと叱られるし、中に入ることもできないからです。

十八年間。物心ついたときから、こういう躾けをされてきました。
「いいか、おまえがちゃんと言われたことをやっている限り、誰も手を出さない。そして誰にも余計なことを言わなければ、おかあさんもおまえも生きていくことができる」
見知らぬオヤジに言われたのです。
怖くて恐くて……。
「生きていくことができる」のではなく「生かされている」だけだと最近、気づきました。
染みているのは彼らの恐ろしさです。見た目はどこにでもいるオヤジでしょう。でもこの部屋にいるとき

は、鬼なのです。
母に言わせると、彼らの中にわたしの父がいるらしいのですが……。
「あの人たちは、おまえのおとうさんなんだから、言うことをききなさい」
そんな母が大嫌いです。肉便器の母が大嫌いです。
母の泣き声が聞こえてきます。その声のトーンから、日本手拭いで猿ぐつわをされているのだとわかります。
来る人によって好みがあるのです。彼らはわたしが言葉を覚える以前からやって来ています。メンバーの変動はもちろんあって、知らない人ばかりのときもあります。

はじめての人ほど、わたしをジロジロ見ますが、手を出してくることは一度もありませんでした。
「お帰り、志絵乃ちゃん」
あまりよく知らない男になれなれしく言われることに慣れてしまっています。
「おまえのかあちゃんな、さっき三リットル、浣腸したところなんだぜ」
「大したもんだよ。栓なしで十分も耐えたんだ」
「ちょっぴり漏らしたからさ。いま、その罰を与えている」
母は窓枠に沿って作られたパイプを組み合わせた仕置き台に吊されています。その装置も昔からあって、

いまは三台目。工事現場の足場のような感じで、布団干しのようでもあります。
母はそこに洗濯物や布団を干します。肉便器ではない日に。
窓を背にして上の水平のパイプに腕を回すようにして縛られています。泣き顔をわたしに向けていますが、目はうつろです。
足首も上のパイプに縛り付けられているため、Ｖの字のように足を開いて、股間を突き出しています。
昔はすべすべの肌でしたが、三十代後半の体になって肌のくすみや、治りの遅い傷跡、火傷跡、そしてちょっと増えている皮下脂肪が弛みをつくっています。

肉便器は排泄も食事も彼らに管理されているので、太る暇はないはずですが、加齢は残酷なものです。

いつか母は捨てられる……。

以前は早く普通の人になって欲しかったのですが、学校に通うようになると、この安定した生活を保つために、わたしが卒業するまでは耐えてほしいと身勝手に思うこともありました。

わたしは勝手に孕まされて産まされた子なのです。彼らのプレイの一貫としてこの世に出てきたもので、その点ではわたしは生まれた時から彼らに嬲り者にされているのです。

いまさら、表面的な優しさぐらいで、彼らを本当の

父親のように思えるわけがありません。
母の性器は度重なる虐待によって、淫らに変形していますが、いまその小陰唇に穿たれた穴に金属のフックがつけらています。左右に二つずつ。いまから思えば昔はピアスのようなもので、使わなければ閉じてしまうものでしたが、いまは鳩目のような金具が入れられて、穴が開いたままになっています。
フックにはチェーンがつけられて、金属の皿をぶら下げています。そこに重さが書かれた釣り用の錘とペットボトルがのせられていきます。
「漏らした二百八十ミリリットルをこっちに、こっちには二百八十グラムの錘を乗せたんだ」

ペットボトルには茶色い液体が入っています。合計五百六十グラム。あくまでおよそですが。
「志絵乃ちゃん、水二百八十ミリリットルは何グラムだい？」
こういう質問にはすぐに答えないといけません。
「二百八十グラムです」
「だよね。じゃ、水とグリセリンを半分ずつ混ぜた液体の場合は？」
「グリセリンの比重がわからないと正確にはわかりません」
「グリセリンの比重は？」
「端数切り捨てで一・二グラム立方メートル。一・二

六なので四捨五入なら一・三です」
「水の密度は〇・九九九グラム立方メートルだ。気圧が一のときで、温度が摂氏四度のときだ。体温で温められると膨張するし、吊されたら厳密には一気圧ではないかもしれないな。ハハハ」
誤差の範囲だと思いますが、こんなクイズを出してはわたしに答えさせたり、調べさせたりして遊ぶのです。
わたしの偏った知識はいろいろありますが、理科系の授業でロウソクの炎の温度分布を教えられたときには、炎の先端よりもその中の方が熱いことや、根元は少し温度が下がることをすでに知っていました。とは

いえ、先端で八百五十度、最高で九百八十度、最低で六百九十度ですから、いずれにせよ、炎で肌を焼かれれば、炎のどこが当たろうとも重傷を負うのです。

線香も約八百度。ロウソクよりも安定しています。タバコの火は燃えているところで七百度ほど。つまり根性焼きはロウソクで炙られるよりは、わずかながら優しさがあると言い張ることができそう。

お仕置きの定番、お灸のもぐさは見た目は熱いようでも肌に当たっている部分は最高で百五十度ほどになると言われていますから、かなりマイルド。しかもその時間を短くする（つまりもぐさの量で調整する）ことで、ひどい火傷にならないようにしていたわけです。

もっとも、ここにいる連中は酷い火傷になるように計算するのが好きで、見た目以上の痛みを求めて日夜、母で試しているのです。

そもそも低温火傷は五十度あればなるわけですし、わたしの知る限り温泉や銭湯でもっとも熱いタイプのお湯でその五十度が限界のようです。いわゆる熱湯風呂は、五十度はないはずです。わたしたちは四十五度のお湯でとても熱いと感じるのです。

伸びきった黒ずんだ陰唇。そこにさらに錘を足していきます。

「美貴江、今日こそちぎれるかもしれないぜ」

「ぐうううう」

黙って自室に入って着替えました。うちの中ではみすぼらしいジャージ姿でいることが義務付けられています。勝手に外出できないようにでしょう。

出て行ないこともないですが、古くてボロボロのジャージ姿を、誰かに見られたくはありません。それに乳房やお尻がこの数年ですっかり大きくなってしまったことも露骨にわかるのです。

おかあさんみたいな体になっている……。

その事実がわたしの怒りに火をつけて、ますます反発したくなっているようです。

裾がふくらはぎで止まっていて窮屈ですが、胸を隠す意味でもムリにでもファスナーをしっかり首まで上

奥付

お読みいただき、ありがとうございました。

二〇二三年二月刊行　第一版

著作権　あんぷらぐ（あんぷらぐど）（荒縄工房）

荒縄工房の情報は下記サイトへ

●ブログ「荒縄工房」

●ホームページ

●荒縄工房　ＳＭ研究室

●今日も上機嫌ってわけないだろ

コメント、メッセージ歓迎。ご意見、ご感想、ご提案など随時、ブログで受付中。